
禁断の恋 トライアングル (番外編)

黎奈

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

禁断の恋 トライアングル（番外編）

【Zコード】

Z3450Z

【作者名】

黎奈

【あらすじ】

本編 禁断の恋 トライアングル の番外編です。
本編を先にお読みになられたほうがいいと思います。

第一章 新婚旅行の知らせ（前書き）

本編 禁断の恋 トライアングル の番外編です。

本編を先に読まれたほうがより楽しくお読みになられると思います。

第一章 新婚旅行の知らせ

今日もコウナは部屋でのんびりと過ごしてくる。

私の誕生日から一年以上過ぎていた。

それからとくに、王は病でお亡くなりになり誰が即位するかという話で城中大騒ぎ。

ゼロは私を相手していられるほど暇ではなくなりてしまった。

だが、ある日突然ゼロが私に言つてきた。

「俺が即位することになった。即位したら身動きが取れない。
しばらくはコウナとも会えなくなるだろ？」

と。

そう、やはり、ゼロが王になるんだね。

私は驚かなかつた。

驚くも何も私はいたつて冷静なほうだし何より、ゼロの兄が王になることを望んでいない。

だったら次男であるゼロに王の座が回るのは当たり前だ。

驚くような話ではない。

「やうなの。それで？」

私はゼロがそれだけの理由で来たわけではないと思った。
明らかにゼロの表情で分かる。

「ムカナ、他に何ひとつは無いのか？」

「何が？」

ゼロは少し悲しそうに囁く。

私は聞き返す。

「・・・まあいい。それより、だ。俺ら、まだ新婚旅行しないだ
う?」

「そうね。」

「その新婚旅行を忙しくなる前に行きたいのだが、いいか?」

「ゼロが行きたいなら・・いいよ。」

「じゃあ、行くか。で、場所なんだが・・海にした。」

「は?」

もつ決めてあるの??

その速さに驚くと共にもう一つ驚いたことがあった。

「だから、海 も。」

「え？ それは、魔法を使える空間から外れているんじゃないの？？」

海、それは三つの国を囲う空間から外れている場所。
だから、海では魔法を一切使えない。

「それがどうした？」

ゼロは関係ないとこいつ風な顔で言つ。

仮にでも私たち王族だよ？？

そんな人たちが海！？

いいのか、本当にツ

それに、私・・・

「仮にも私たち王族だし・・・海なんて・・・」

「関係ないさ、王族なんて。な、海、行こいぜ？」

私の戸惑いにゼロは気づかない。

私は王族なんかより自分の身を案じていいのだ。

私は泳げないし、水は嫌い・・・怖い

「行きたくない・・・

私は呟いた。

「え？」

ゼロは一体何を言つてるんだという風な眼で見つめてくる。

私はうつむいて

「行きたくない・・・」

と、ゼロに聞こえたのよつて叫ぶ。

「なぜ、だ?」

私の異変にゼロが困惑の理由を聞いてくる。

「私、泳げないもの。」

理由を叫ぶ。

「泳げない? だったら、俺が教えてやるから、な? い、いつぜ、海。」

ゼロは私への説得を諦めない。

どうしよう。

ゼロに本当のこと叫ぶのか?

それとも黙つておくべき?

いや、ほかに手段はある。

ロイを・・呼ぼう。

ロイがいれば、何とかなるかもしれない。

そつよ、ゼロに教えずとも事情を知ってるロイなら・・

「・・分かった。でも、本当に泳げないから。」

「大丈夫さ。俺がいる。」

私の言葉にゼロは優しく微笑む。

「いつなの？新婚旅行。」

「一週間後に予定している。およそ三泊四日の予定だ。」

「もう、分かったわ。ゼロはまだ忙しいのでしょうか？」

「ああ。またくるからな。」

そう言って出ていった。

ゼロの気配が遠くなるのを感じた後、私はロイに手紙を書いた。

ロイへ

急でごめんなさい。

私、ゼロと進行旅行へ今から一週間後に三泊四日で海に行くらしいの。

ほんとは行きたくないけど、ゼロの頼みは断れないし。
ロイが忙しいのは分かつてることで来てもらえないかな？

偶然つてことにしてもらえないかな？

私が呼んだばれたら、後で責められちゃう。
いい返事待っているね。

コウナより

これを封筒に入れて伝書鳩で送る。

本当にいい返事を期待していた。

水は私にとって、脅威の存在にしかないのだから。

第一章 新婚旅行の知らせ（後書き）

番外編を書くことにいたしました。

他の連載小説と平行に進めていきたいと思いますので

投稿は遅いと思いますがそこは理解してくださるとうれしいです。

他の連載が多くてごめんなさい。

思い付きばかりで書き出した小説ばかりですから・・・ほんとに「めんなさい。

第一章 新婚先は海に決定。

私がロイに伝書鳩を送った後すぐに返事が来た。

コウナへ

もちろん行くよ。

コウナの頼みを聞かなかつたことなんて一度もないよ。じゃあ、海で会おうね。

ロイより

ロイが来てくれるることとても私はほつとした。

そして、今日、もつ新婚旅行は始まつとしていた。

嫌なことが先にあるとすぐに来てしまつことを改めて思い知らされた気がする。

憂鬱なまま馬車に乗つて海がある場所まで行く。

宿は海で経営しているホテルで泊まることになつたらしい。

馬車に乗つている間、ゼロはやけにうれしかつた。

そのことを、

「ゼロ・・せけつれしそうだね。そんなこつれしこのの？」

と、单刀直入に聞く。

すると、いきなりゼロが私の体を自分に引き寄せキスしてきた。

唇が重なる。

「んつー・・・・い、いきなりつ何するのツー？」

唇を開放されると、私は思わず声を荒げる。

「お前はうれしくないのか？俺との新婚旅行。」

ゼロは私の動搖を 私が旅行を嫌がっている と、勘違いしている
せいか 悲しそうな表情で聞いてくる。

うう、そんな顔されると私どういえばいいか迷うんだけど・・・
はつきり行つちやおうか、海は嫌だと。
でもなあ。それはちよつとこまちりつて感じもするし・・・。
「べ、別にうれしくないわけじゃないよ。ただ、そんなに表情に出
てるからつー・・・。」

結局、他の言い訳を言った。

「俺、そんなに顔に出るのか??」

ゼロは マジか？ と真顔で聞いてくる。

ゼロ・・・自覚なさすぎ・・・

心でそう呟く私。

「うふ。 分かるぐらじょく」べ。

だから、この際せつめつと叫んでやつた。

「わうか。 それなら少し抑えないとな。

と、ゼロは納得したよつて叫んで。

抑えられるの？？本当に？？

内心すこべ不安になつた。

「まあ、頑張つて、時期国王様？」

無理だよ。絶対言葉だけ。

心中では否定する。

「やうだな。王としての直覚を持たないとな。

ゼロは自分でうんうん頷いていた。

そうじてこむちに海に着いた。

先にホテルに向かつて、手続きを済ませる。

なぜか、部屋はゼロと同じ一室。

「別じゃないんだ・・・」

思わず諦めたように呟く。

内心そういうじゃないかと予想がついた。

昔と打って変わったもの・・ゼロの積極さが・・。私、なんか口汚いよ、その辺が。襲われそうで。

ああ、なんか震えてきた。

「じゃあ行くぞ。早速部屋に行ったら、財布と必要なもん持つて海に行くからな。」

ゼロが平然と、でもうれしそうに叫ぶ。

「ええ。分かったわ。」

そつと私はゼロについていく。

その後、着替えで恐れていたことが起つた。

きつと、

「なんで来るのッー?」

「え・・一緒に着替えようと・・」

「なんでもー？」

「いや……だつて……」

「だつて……なんてだめつ……早くそつちで着替えてよつ……」

「え・・せつかく同じ一室なんだから・・・」

「そんな理由で覗かないでつ……」

「覗くつて・・俺そんなことじゅ・・ただ一緒に・・・」

「嫌つ！…海なら一緒でしょお？？だから覗かないでつ……来ないでツ！…」

「そんなに嫌がらなくとも・・・わ・・・悪かつた・・・」

と言ひ声が・・部屋の外で聞こえただろ。

まあゼロの声は聞こえてなかつたとしても私の声は完全に漏れてい
たと私は思つ。

着替えの後も私はゼロから少し離れたところへいた。

「俺が悪かつた。もうしないから俺から避けるのはやめてくれ・・・

ゼロのそんな悲痛な声に私はやつとのことで警戒心を解いた。

だが、まだ完全には警戒心を解いてはいない。

解けるわけないんだ。

だつて、下着だけの状態を見られたとはいえゼロが理性失いかけて抱きついてきたのだから。

そんなもの許せるわけがない。

許した人がいたらお願い・・私に会わせて。

そのときに　あんたにプライドはないのかつ！　つて怒鳴りつけ
てやる。

その後いろいろ語つて・・それからそれから・・・

数え切れないからこれで終わるけど、

私は覗かれるまでゼロがこんな奴だと思わなかつたのだった。

それからなんとか海まで行つた。

海にはたくさん人がいて
露店が並んでいるほうはおそらく身動きがなかなか取れないほどの
混み具合だった。

海岸はまだマシなほうだった。

ロイはまだかときよろきよろ見渡したがなかなか見つけられない。

ゼロは風にそよがれて気持ちよさそうな穏やかな顔だったが、それ

が急に陥じくなつた。

「どうしたの？」

思わず聞いてしまつ。

「場所移動するわ。」

ゼロはそれだけ言って私の腕をつかむ。

「え・・・ひよっとー！ や・・・触らないでっ！」ゼロは叫び

わつかの恐怖でまだ体がゼロを拒否する。

「そんなに拒絶するなつ。もつと抵抗をなくせシ

ゼロは焦る。

私はゼロが急いでいる理由が分かつた。

それは・・口いつ・・

「ロ、ロイガアセー！ ハー！ なんでも逃げようとしたのー・ロイ
フー・ロオーライー！」

何とか私は遠くこころのロイに見つけでもらひたいと云ふ。

「ロホー――んつ・・むぐつぐべべべー・・」

ロイの声を云ひましたがゼロが私の口を大きな手でふさごてしま

う。

「むつ……むぐぐぐつ……」

必死に抵抗する。

「じひ。見つかるだらつがツー呼ぶなツあいつをつー…」

ゼロは私に言い聞かせるように言つ。

だが、ゼロの行為は余計にロイを氣づかせてしまつた。

「あつ、偶然だね、
ユウナつ会つたかつた。・・・といひでゼロ君、君はユウナに一
なにをしようど??」

ロイは早々に私とゼロのいる場に来て言つた。

私には穏やかな口調のロイがゼロに対して静かにでも迫力のアル怖
い口調で聞いた。

ロイつ……来てくれたんだ。助かつた。

「もう一回言つよ。ビツヒゼロ君がユウナに対してもこんなことを
しているのかなあ??」

ゼロはロイの迫力に呑まれつゝと黙る。

「いい加減、放してあげて??」

私をつかむゼロの腕をロイがつかむ。
そしてゼロから私を引き離す。

「ロイ。ありがと。ロイの姿を見て、
ロイを呼ぼうとしたらいざロイが急につかんできと・・ほとんど助かつ
たの。ありがと。」

私はやつれてロイのまくへ身を断わる。

「一・コウナ、ロイの方へ寄るな。」うちに来い。」

ゼロは怒りで震える声を抑え、私に腕を伸ばす。
ゼロの腕が私にまくされになつて、

「こやつ。」

思わず声を上げると

ゼロの腕はロイによつて私に触れることを免れた。

「コウナがこんなにも去えてる。君はそんなに乱暴に扱つたのかい
？？」

それとも・・まさかとは思ひナビコウナの着替えを覗いたりとかそ
うことをしたのかい？？」

ロイはゼロの腕をつかみながら言つて。

す、鋭いつ。

私は覗きと詠つ言葉に大いに反応を示した。

ゼロも顔をじわばりせて引きつった表情になる。

「まさかっ本当にしたのかいっ…？ねえ、コウナ、本当に？」

ロイの まさかね という表情で私に聞く。

ゼロは私のほうに視線を送り 言うな と言っていることを悟った。

ゼロが悪いんだからね？

そう思つて恥ずかしながらもこくんと頷く。

そのときのゼロの顔はすぐ青ざめていた。

ロイは これで責めることができる と言つよつた笑みを見せ、その後、真剣な顔つきになりゼロを一気に責め立てる。

「ゼロオオおおおお”君という奴はあああ”コウナをなんていう目にあわせるんだつ。

だいたいコウナは纖細で傷つきやすくて壊れやすくて周りには ガラスのバラ と呼ばれているほどなんだよお？？それなのに、君といつやはああああ ”もっとコウナをね、大事に大事にそれはもうすぐすぐ大事にしてあげなきやいけないんだよ？？第一君はもっとコウナに――――」

ロイのゼロに対する私のための説教はすごかった。

長くて長くて、それはもつと私をほめるような感じでゼロに責めて攻めてせめまくっていたの。（責める・攻めるの一つの言葉を用了たのは両方の意味をロイの言葉には含んでいたから。）

「の説教、いつまで続くの？」

私が頷いたのがいけなかつたのかな？

でもいいよね、ゼロがいけないんだし。

それに、ロイにせめられてくるゼロはなんだかものすゞしく見ていて楽しいわ。

いまも・・

「いや、だつて、俺とコウナは夫婦だし・・・べつにいいかと・・」

「夫婦？？夫婦だからってコウナが嫌だと言つものをなぜやううとするんだつ。君はもつといつコウナをね―――」

とか、

「なんで・・俺はそんなにお前なんかに言われなければ・・・」

「なんでもですつ。コウナを大事に思つてるのは僕も同じなんです。ほんとは君には渡したないです。でも君がそんな奴なら僕も考えないといけませんね。

こんな君には・・

「

「わかった、もうしない。」

「ほんとに? いや、信じられないし、もう遅いですよ。大体君にはコウナの存在の大きさが分かってないです。コウナはこの世にいてはならないんです。そ「ウエをあなたは汚すような真似を・・そんなこと許されないですからね、もっとコウナをそれはもう宝のように大事にしなければ――」

とか。

ゼロが以外にも弱気なところが見ていて面白い。

でもいい加減長いんじゃないかなあっておもつ。

私は太陽の位置を見てそう思つのだつた。

第一章 新婚先は海に決定。（後書き）

ゼロがロイにせめ立てられるシーンが多くなってしまいました。

でも、こんなゼロもいいでしょ？

逆にこんなロイもありでしょ？

好みは読んで下さっている皆さん好み次第ですが・・・。
ぜひ、それを聞かせてくださいというれしいですね。

第三章 海は危険

ロイがゼロの説教を終わらせたのはもう少し遅めだった。

終わらせたといつよりも私が止めたんだけどね。

そのときロイが私にいろいろ語りてくれるかなつと黙ったんだけど

「ゼロに警戒心を解かないよつとするんだよ~もつしないとは思うけど、念のため、ね?」

と、軽く語りだけで済ませられた。

「うそ。ありがとう、ロイ。」

私はゼロに語りてくれたこと感謝してお礼を述べる。

「じゃあ泳ぐか。」

「え・・・」

ゼロが言つ出す。

私は「」惑つ。

「大丈夫。僕がいるから海を警戒しないで、ね?」

「うん。」

ロイの言葉に少し気を緩めた私。

海を警戒しちゃだめ。

警戒しただけでも私は・・・

「じゃあ行こう。」

ロイは私の手を引いて海にゅうくり入つていいく。

「なんであいつが・・・コウナは俺のものなのに・・・」

私とロイの背後でぶつぶつ呟くゼロ。

やりすぎだった?

ゼロがすねちゃつた。

でもね、ゼロが悪いんだから反省してみつ。

心の中で囁く私。

海水が腰の辺りまで来たときビクッと体が震えた。

「大丈夫。怖がっちゃダメだよ。僕がいるんだから大丈夫。」

ロイはそう言って私を安心させようとしてくれた。

「う、うん。」

私は頷く。

だが、体は正直なもので少しまだ震えていた。

海水が胸まで浸ると

「僕が背中を浮かせるから海に浮いてみようか。
海に体をなじませれば、海は何もしてこないかい。」

「うん。」

ロイの声に私は頷く。

「心の準備はいい?」

「うん。」

私は頷き、ロイが私の背中に触れたときもまつと目を開じた。

体が浮き上がり、長い自分の髪までもが浮く。

私は目を開けた。

「どう? 海と一緒になれた?」

ロイは聞く。

「うん。」

私は微笑む。

さつきまで怖くて体に触れる水に対する違和感を感じたのに今はまるでない。

これもロイのおかげ。

そうこうおつとしたり、急に背中に合ったロイの支えが消えた。

「……」

私の体は一気に沈んだ。

く、苦しきシ

息ができないと感じたとき、海と一体したときの感覚はすでになく、まるで敵に囲まれている感覚に襲われた。

だが、それは一瞬のことだった。

体はすぐに誰かの手によって起き上がり、そのまま沈んでいた顔がすぐに海面へと出る。

そして、誰かに抱かれる。

「ユウナッ！ 大丈夫っ！ ？怖くなかった？ 平氣だつた？ ？ゼロッ！ ……お前が急に手をつかむからこんなことになつたんだつ！」

「！」

声からして私の体はロイに抱かれていたと分かる。

ぼんやりとした視界にはロイとゼロの一人の姿が映る。

ロイはゼロに激怒していた。

「悪かった。ユウナつ！悪い。大丈夫だつたか？」

ゼロは私に謝る。

私が答える前に、ロイが答える。

「大丈夫なわけないじゃないかっ！！今、ユウナはおぼれかけたん
だぞっ！？」

ユウナは泳げないんだつ。それを知つててなんで僕の手をつかんだ
！？」

ロイの問いかけにゼロが答えるより早く私は

「・・・私は・・・大丈夫だから・・・ロイ・・・ゼロを責めないで・・
ゼロは・・・ただ・ヤキモチ妬いたの・・・でしょう・・・？」

と、途切れ途切れに言いつ。

「うう・・・・・」

ゼロは囁きりしきく反論できない。

「もう・・・大丈夫だから・・・」

私はなんとか一人に微笑む。

「ユウナ・・・」

「・・・ほんとに悪かった。」

ロイは私を心配そうに見つめ、

ゼロは本当にすまないことについて後悔と自分を責めているような表情で言つた。

「ユウナ……とつあえず、海岸に戻ろ。まだ、昼食とつてないから、休憩がてらひつしよ。」

ゼロはこぶしがゅつと握り締めてそのまま歩き出す。

海岸にたどり着き、近くのこすて座ると

「ゼロのせこだつたんだからゼロのおじりで何か買つのが筋つてもんだよね??」

「ハハ・ハハ・」

ロイが早々にゼロを責め、ゼロはうなつた。

「ロイ……それはあまつとも……」

私は反論しようとしたが

「ユウナ、君はあの時、ゼロのせこでおぼれそつになつたんだよ?怖い目にあつたんだよ?」

僕はそこでユウナを失つことになつたりと想つと……僕は嫌だよ。

「

だからその責任とつてもうおひね? と付け足して私の反論は聞いてくれなかつた。

このときのロイは私には笑つてくれたけど田井本氣だつたし、ゼロを見る視線はとても冷たかった。

「じゃあ、買つてきてね～」

「ああ。」

ロイの冷徹な笑みにゼロは反論するJとなく一瞬だけ買つに行つてしまつた。

しばらくしても、ゼロは戻つてこない。
よほど込み入つてゐるのだらう。

遅いなあと思つて辺りを見回してみると
誰かがものすJ速で私じやなくロイに向かつてするのが見えた。

「やばい・・みつかつた・・・」

それにロイも慌ててロイの顔が青ざめていた。

ロイに向かつてきたのはロイも勝てないロイの侍従だった。

「見つめましたよ、王子Jいー。」

逃げやしの早い方なんですから、侍従の立場を考えてください。
ああ、これはこれはユウナ様。お久しぶりです。
わたくし、ロイ王子の侍従をさせてもらつています。
では、まだ、ロイ王子にたんまりと国務がありますゆえ、引き取らせてもらつます。」

「はあ。」

ロイの侍従は私に視線を向け挨拶を簡単に済ませ、ロイを引かずつていぐ。

「ま、待ってくれ、まだコウナと話がつ――――――――――――――

ロイの言葉に耳を傾けずそのまま去つていった。

引かずられるロイを見てロイがかわいそうに思えてきた。

同情するよ・・ロイ。

そう思いながらも見送ることしか私にはできなかつた。

じぱりくじてもロロは来ない。

ほんと、遅いなあ。

だいじょうぶかなあ？

行き違ひは避けたいため、せつせから私はいすから動いていい。

するどゼロではない背丈の高い男性の四人組が私に近づいてきた。

「お嬢さん、こんなところにいるんなら俺たちと遊ばない？」

その中の一人のピタスをしている男性が私に言つ。

なんか・・チャラついてる。

心の中で一言述べる。

「人を待ってるの。だからいけない。」

私はいけない理由を簡単に述べる。

「いいじゃん、別に待つていなくても。だつたらそれまで海で泳ぐ
うぜ？」

ピアスをつけた男性が私に手を伸ばしてきた。

「いやつ。触らないでっ。」

私はその手を払いのける。

「お、威勢が良いじゃん。だつたら、これならどうだ？」

ピアスをつけた男性がほか三人に何かしらの会図を送る。

その瞬間、私は三人に腕をつかまれ、抵抗できなくなつた。

「は、放してっ！」

何とか必死に抵抗するが男性三人に捕まられたんじゃそれも無意味。

「そのまま、海に連れて行け。おぼれさせれば、おとなしくなるだ
らね。」

海ツー！？それだけは嫌つ！！

私は必死に抵抗するが無理やり立たされ、海に連れて行かれる。

「や、やめてっ！…放してっ！…」

声に出すがそれもむなしく過ぎ去る。

私の胸あたりまで海水が浸った。

海岸からは少し遠い。

いやっ・・海・・怖いッ・・やめて・・水は・・怖い。私の・・敵
つ！-

ロイたちと入ったときの堵感はなく、私の体は海水に何もかも奪
われていくようだった。
恐怖心もこみ上げてくる。

「やれ。」

ピアスをつけた男性が他三人に団団を出す。

「はなっ――ぶくぶくへう・・

私は頭を抑えられ海に沈められた。

く、くるじこ“”いつ”“いきがあ”

息苦しくてビクンともなくなる。

足から頭すっぽりと海水に浸り、恐怖心が冷静さを失わせ、私はパニクった。

「いやあ・・・怖い、敵敵てきときい”――い”――

ザップ――ン――

私を沈める男性たちは

「お、おこりやばい波が来た!?逃げるぞッ――」

私をおいて逃げよつとする。

私と男性たちはそのまま波に飲み込まれた。

体が海水に自由を奪われ、息苦しくて恐怖心が心を病にかけた。

水つ怖いつ――敵ツ――いやあ”いやつあ”“やだつ”怖いつ”

心の叫びはまるで海の意思に伝わったかのようになつたかのようになつた

『そ”な”た”は”あ”～”海の”^{われらの}敵い””』

海は私を蝕んでいくより深いところへ押しあつていへ。

首は意思のある水によつて縛られたように窒息しが増した。

水の流れが深い深い海の谷に落とされはじめてくるかのような・・・

私は海に呪われている。

呪いが私の心と共に鳴りあつて私を呪う。

い・・き・・が・”・・も・・む・・り・・だ・・

おぼれしていく中、

私は水面に誰かが潜りこんできたのをぼやけた視界に映ったのを最後
後に私は気を失つた。

第四章 ロゲンカ？ 1

ユウナを助けに海にもぐりこんだのはロイだった。

なんとか侍従から逃げ出しユウナの元へと走つて
海岸のほうにたどり着いたら海は大きな波を作つていた。
その波がユウナに絡んできた男ともどもユウナを飲み込む瞬間を目
で捉えていたからだつた。

ロイはいち早く海に飛び込みユウナの姿を探す。

みつけたっ！

ロイはユウナの姿を見つめた。

ユウナめがけて必死に泳ぐ。

ユウナっ！待つてッ！いまいくからっ！

ユウナに腕を伸ばしユウナをつかむ。

そして海面に向かつて一心不乱に泳ぐ。

海面に顔が出るといち早く立ち上がり、ユウナを抱えて海から出る。

そして海辺にとりあえずユウナを横たわらせた。

そしてロイはユウナの胸に耳を当て心臓の鼓動を聞く。

とくん・・・・・とくん・・・・・とくん・・・・・

ロイはひととまづ安心した。

そして次は呼吸を調べるためコウナの口元に手をかざす。

が、何も吐く息すら感じない。

「コウナつーー!?

ゼロがこのとき、ロイとコウナの田の前に現れた。

「何があつたんだ!?

ゼロの問いにロイは答えず

「息を・・・していな・・・」

と、海辺の砂を握りながら悔しそうに言ひ。

「コウナつ。もどつてきてくれつーー!」

ロイはそう嘆き、コウナを抱き上げ、大きく息を吸ってキスした。

人工呼吸

今までにロイがしているのがそつだつた。

ゼロは呆然と見ていることしかできなかつた。

今の状況に頭がついていけないんだ。

ロイは何度もユウナと歯を合わせてしている。

その数が増えるたびにロイは焦り悔しそうに顔を歪ませる。

「ユウナア” “！・・・・・

ロイの悲痛な叫びにゼロははつとしてユウナをロイから取り上げた。

「！？」「

「俺が・・やつてみる。・・・ユウナっ！戻つてここつ！・・・

ゼロがユウナにロイと同じように人工呼吸をした。

ユウナだけは・・・ユウナだけは失いたくない！！
失いたくないんだッ！！

ゼロは何度もしてそして一筋の涙がゼロの頬をつた。

ゼロがユウナから歯を放すと

「・・・ゲホッ」

ユウナは水を口から吐き出した。

このときのゼロとロイの顔は悲しく歪んだ顔から喜びに満ちた顔へ
と変わった。

コウナはいのとやつひかりと田を開けたがそれは一瞬のことで、すぐ意識を失った。

「『ドローニー』まだ油断できない。早く、早く部屋へ連れて行くんだッ！」

ローマーの口を塞ぎ出しじゼロをせかす。

セントラルロードロードゼロを部屋へと運んだ。

部屋へ運ばれたコウナはその晩から発熱しつなれていた。

「のとや、ゼロとロイのほかにロイの侍従もいた。

言ひ合ひなんじしている場合でないはずだが、

ローマーの侍従はローバンかに似た言ひ合ひが始まった。（ゼロ視

點）

「おこつ侍従！－！何度言つたら分かる！？

コウナがこんな状態なのに、なんで国務があるから帰れなんて言えるんだ！？

お前はコウナつつ國務を選べと言つのかッ！？

（ロイ・・・こつこまつて激怒してゐる・・無理もないか・・コウナ
だもんな。）

「せつですつ！－！国務を選んでください！－！あなたは日本ですか？－？

お立場をお考えになつてください！－！あなたは日本ですか？－？」

侍従がとんでもない」とを叫ぶ。

(侍従・・あんたは人の命より国務をとるのか！？)

「王子が何だ！！僕は王子である前に一人の人間だつ！！
お前はあのままコウナを見捨てろと言いたいのか！？」

負けじとロイが言い返す。

(不本意だがそこはロイと同感だな。もつと言つてやれ！)

「そうですっ！！そうに決まつてます！！人の犠牲なくしては政治
など勤まりません！！」

開き直り気味の侍従。

(おいつ。侍従！！お前は命を何だと思つてゐ！？)

「犠牲だとお！？人一人救えなくて何が王子だつ！！
お前は国務があるからと愛しい者を置き去りに・・見捨てることが
できるのかッ！？」

逆上するロイ。

「それはつ・・！..

ぐっと押し黙る侍従。

(よく、言つた！ロイ！..)

「・・・私、そんなのこませんから分かりません・・・ですがお立場を良く考えてくださいーー！」

侍従が立場を持ち出して言ひへ。

(ほんとにいなか・・?侍従・・それはなんかさびしい気がするだ。)

「・・・わかった。立場はわきまる。だが、僕は王子である前に一人の男だ。

愛しいと思つ相手は・・ゴウナは何があつても守る・・守りたいと思つ。

失いたくないとも思つ。ゴウナのためならゴウナ以外全てを犠牲にしたつてかまわない。

僕にとつてゴウナはかけがえのない存在なんだ。それだけは覚えておいてほしい。」

ロイは自分に確かめるよつた口調で言つた。

(・・ロイ・・お前・・そんなに・・でも、俺だつてつーー)

「分かつたらじまじく席をはずしてくれ。国務のまつは頭で考へてある。

帰つたら早急にやるから今は勘弁してくれ。」

「・・・帰つたら本当に早急にやつてくれ。では私はこれで・・

・」

ロイの言葉に侍従は従つ。

そして、ユウナの寝る部屋には俺とロイが残った。

あんなに大声で言い合っていたのにユウナは意識を取り戻さない。

大丈夫だろうか・・と、思いながらユウナの頬を撫でる。

熱があるせいか、頬は赤くほんのりと染まっていて・・触れると熱かつた。

第五章 口ゲンカ？ 2

ユウナは熱でうなされていた。

「・・・こわ”い・・・やめて”・・・いやあ・・・」

それはユウナが熱でうなされていく間で一番最初にロイにかけた叫葉だった。

「ユウナっー」

「ーーー」

ロイはユウナに抱きつき、ユウナを懸命に撫で続ける。ゼロは呆然とそれを見ていた。

「・・・み・・みずつー・・・こわ”いつ・・・いやあ”・・・てきこ・
・てきい・・・・」

ロイの動作にまつたく反応せなかつき以上にユウナは叫ぶ。

これを 寝言 といえるほど小さなものではない。

こんな叫び声はもう何かに惑わされてる・・狂わされている・・とか
しか言じようがない。

そんな叫び声をユウナはするのだ。

熱のせい・・それだけで叫んでいるともいえなかつた。

ロイはそんなコウナを懸命に撫でて落ち着かせた。

「ゼロ・・君はコウナの過去を知らないだろ?」

「あ。」

ロイの言葉に悔しながらも俺は頷いた。

「コウナはね、水がトラウマなんだよ。」

「…。」

ロイは俺に視線を向けながら囁つ。

「ゼロ、君はコウナに海に行こうと誘つたらしいね?」

そのときコウナは行きたくない と言わなかつたかい?」

「…。」

俺はこぶしを握り締めて言った。

「ゼロ、君はコウナをなぜ、海に連れ出した?」

「・・少しでもコウナとの思い出を作りたかったからだ。」

俺は歯を食いしばって言った。

「だったら海じゃなくてもよかつたんじゃないのか?」

「・・・コウナとまだ行ったことがないところの中に海が残つたんだ。」

「

俺は言った。

それは本当のことだ。

初めての場所でコウナと一緒に思い出を作りたかったのだから。

「やうか。君はそんな理由で無理強いたせたんだね？コウナに・・・」

俺はロイの言葉にカアーッとなつた。

「ロイにそんな理由なんていわれる筋合いはない・・・」

第一お前だってコウナを連れ去つたときコウナを辛い目にあわせただろう！？」

「それはすべてコウナのためだ。そのためには多少の犠牲はやむをえない！」

「ロイには多少でもコウナには大きかつたんだ！！

第一それはコウナのためじゃなく自分のためだつたんじゃないのか

！？」

俺はロイに怒鳴りつける。

ロイもカアーッとなつて怒鳴る。

「自分のためだと！？僕はコウナを危険な目にあわせない！..
絶対守りぬく！...」

「ぜつたいだとおー？ そのために手段を選ばない奴がなにをこつー？
そのせいでコウナが傷ついてきたといつのことかー！」

ゼロも大声で叫ぶ。

そのせいでコウナは一時的に目を覚ました。

コウナはむくつと上半身を起こして辺りを見回す。

それに気づいたゼロは

「コウナつー！」

と、叫び、コウナの体に触れる。

「まだ起きるな。熱があるだろ？」「

ゼロは叫づがコウナはそれでも寝みつらせず

「・・・ケンカ・・しあわだめだからね？」

それと・・口イ、勝手にしつちやだめだからね？

私が呼んだことばれちやうじやない！

私が後で責められちゃうんだからー！」

「ーーー！」

「ーーー？」

と、二人に向かつて言う。

一人はそんなユウナに驚き言葉が出ない。

一人だから、ロイに言つたこともゼロには聞こえていいのだが。

コウナはそのあと、ゼロの腕をつかみ

「・・・頭・・痛い・・くらくらする・・ガンガンする・・・フラフ
ラ・・するう――」

と、言つて倒れた。

「ユウナッ！！」

ゼロはユウナの背に腕を回して体を支え寝かす。

「なあ、ロイ、呼んだってどうしたの？」

ゼロはロイに向かつて静かに問う。

「コウナのセリフにもあつただろ？僕からはいえないなあ。」

ロイは冷や汗を流しながら言ひ。

「だったら、ユウナの過去のこと教えてもらえないか？」

ゼロは口に視線を移して言う。

「それなら・・・

ロイも仕方ないといった感じで話し始めた。

第五章 口ゲンカ？ 2（後書き）

次回はユウナの過去をお送りいたします。

第六章 ノウナの過去 1

「昔、ノウナは小さい頃、一度だけ・・広い庭にある湖に落ちたんだ。」

ロイはそう言ひて語りだした。

「それまでは僕と一緒に水遊びとかしていたし、ノウナは平氣で水に触っていた。」

「・・・」

ロイは悔しそうに云ひか悲しげに話し出す。
ゼロは息を呑んでロイの話を待つた。

「ゼロ、ノウナはね、

この世に存在する生物や妖精と話すことが・・できたんだ。」

「・・・」

妖精と!?

そんなことがあるのかつ??

ゼロは驚いてロイを凝視する。

「驚くのも無理はない。

だが、話すといつても言葉ではないんだ。
感情を相手に伝える方法でなんだ。」

だから、水の精ともそれまでは仲がよかつた。
ユウナは水が大好きだったんだ。」

ゼロは驚き、それに苦笑しながらロイは話を続けた。

「僕はその頃、よくユウナのところへ遊びに行つてたんだ。
だから、その偶然おきたあの事件の日もいたんだ。」

ロイはそのときの過去を思い出すかのように遠い日をした。

「そう・・・そのときは・・嵐が来る直前の日だった・・・

ロイはそうこうしながら思い出を語り始めた。

第六章 ニウナの過去 1(後書き)

今回、すいじくすいじく短いです。
これから家の都合でとても短くなると思います。
了承してくださるとうれしいです。

第七章 ニウナの過去 2(前書き)

ロイ視点です。

第七章 ユウナの過去 2

その日は嵐だった。

でも僕はユウナのところにいったんだ。

だって、近いもん、滞在場所も、ユウナとの心も。
→ハサウエーの心

「ユウナ、遊びにきたよー」

屋敷に入つてユウナの部屋の扉を開ける。

「ロイッ！！」

ユウナは僕に抱きついてきた。

ユウナ！　！

僕うれしきよ、でも驚いた。なんで？

「ねえねえ、外行きたいの！

いつでいい？みんなダメっていうの……」

ユウナは僕と比べて小さいし幼い。

だからおねだりする姿は我慢できないよ

「え、ユウナ、今嵐だよ？

それなのこいくの？」

僕はとりあえず聞いてみる。

だつていきたいには理由があるでしょ。

「うふ、いくいく。

精靈さんたちはしゃいでるの。

私もまざりにいきたいっ――――――!

ねつ、いいでしょ？

ロイ、いいよね？ねつ？

僕は今、究極の選択を強いられた。

ここで断つて泣かすか、

頷いて嵐の中にユウナをいかせるか。

それか、

う～む、実に難しい選択だ。

そしてキラキラした顔でねだられたら答えは一つになってしまつ。

「・・う、うん、いいよ、でも雨具着て、僕も一緒に行くからね？」

僕は自分もついて行くと言つた、だって一人で行かせられない。

「うん、それでいいよ・

ロイ、だーいすき！・

ユウナは再び僕に抱きついた。

ああーーーへへなんてぼくは卑怯なのだろう、この快感一つのために、後々ユウナを困らせるなんて。

そんな会話の流れで嵐の中へ行つたのだった。

「ユウナッそこまで行くと危ないって

僕は風に負けないよう、叫ぶ。

ユウナは湖のふちに湖を覗き込む態勢にいた。

危なすぎて僕は近寄れない。

風が音が僕を近づきさせないみたいだ。

「だいじょぶだつて・・・・・あーーー！」

ユウナが叫ぶと同時に・・・

「ユウナウウ”ボチャン！－

と、強い風邪に押されユウナは湖の落ちた。

「ユウナッ－！」

僕はこのとき気がついた。

精霊は力を暴走させているのだと。

だから止められないのだと。

僕に助けを求めていることを。

そのせいか、風は僕を湖のほうへと力強く押し始めた。

その風に乗つてズッボーン”と僕も湖に飛び込む。

ボチャーン・・・ブクブクブク・・・グイツ

ユウナは波に飲み込まれ苦しんでいた。

まるで裏切られたと思つてゐるようだ。

精霊はこんなことしたくないのに、嵐がそれをさせている。

僕はユウナを引っ張り、助けた。

ザブツ

なんとか湖からはいでた。

ユウナは

「げほっげほっ」

と、水を吐いて、僕に抱きついた。

身体は震えている。

寒さだけじゃなかった、恐怖からもきてただろう。

「ロイツ、ロイツ、ロイーーー」

抱きつき、震えて恐怖するユウナを始めてみた。

「ユウナツ、もう大丈夫、だから戻ろう

僕は震えるユウナを抱きしめて、背に担ぐと、屋敷へと戻った。

ユウナの侍女が僕になんどもありがとひいざこますと頭を下げた。

「僕のせいだから、謝らないで下さい。」「

「でも、助けてくださいました、それにあの時も外へいかせなければおそらくは不満が高まって暴走していただしよう。
それを思えばよい判断だったのです。結果はどうであれ、仕方ないことです。

それにユウナさまは無事でした、それが何よりも感謝です。」

侍女はそう言つたのだった。

無事は無事だつたけど、しばらくは水を受け付けなかつた。

そのたびに僕はユウナの傍に居た。

ユウナは僕の傍にいれば水を嫌々飲んだから。

そのたびに水に恐怖し、精霊から心を開かせし、

水の精霊にはそれ以来近づかないようになっていた。

嵐風のときほんつも震えて部屋におとなしく歸ると聞いていて、それからコウナの性格は変わってしまったのだった。

僕は自分のせいだと思つてゐる。

そりやあ、あんな可愛い表情でねだるコウナもわるいけど、それに負けてダイスキという言葉で自分を満たす馬鹿な僕だもん。

それが償えるように頑張つてコウナと絆を深めて恋を育んできた。

コウナは大きくなつて、性格も少し冷酷になつちやつたけど、僕を見つめるあの瞳は成長しても変わらなかつた。

それが何よりも僕にとっての報いだった。

第七章 ユウナの過去 2(後書き)

久しぶりでごめんなさい。
えと、明るくてユウナに一途でヘタレ?な口音でした。
ユウナなんか人格違いますね、アハ^
でも、幼いときですしロイも翻弄されたみたいで
私はよくできたと思います、ではまたの機会に

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3450n/>

禁断の恋 トライアングル（番外編）

2011年2月1日19時00分発行